67 『長沙走馬楼三国呉簡・竹簡』と『傷寒論』

猪飼祥夫
北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部

一九九六年に考古発見された湖南省長沙市の走馬楼の木牘竹簡類は、これまで『長沙走馬楼三国呉簡・嘉禾吏民田家莂』と『長沙走馬楼三国呉簡・竹簡』として出版された。これらの竹簡類には多くの疾病名が含まれており、その内容に特徴がある。竹簡・木牘は、行政文書であり、今日の戸籍と収税文書にあたるものである。

簡牘の年号は、最も早いものでは後漢の献帝の建安二十五年（二二〇）、もっとも遅いものは呉の孫権の嘉禾六年（二三七）である。『長沙走馬楼三国呉簡・嘉禾吏民田家莂』に記載された年度は、嘉禾四年（二三五）と嘉禾五年（二三六）である。

一方『傷寒論』を述べた張仲景は、名は機、仲景は字である。宋の林億は、『傷寒論・序』に唐の甘伯宗の『名医伝』を引いて、南陽の人、名は機、孝廉に挙げられ、官は長沙太守に至ると言われている。『太平御覧』巻四四四に『何顒別伝』を引いて、同郡の張仲景が子供の時に何顒とあったという話を述べ、『後漢書』によれば曹操に仕えた何顒は南陽襄郷の人といっている。すなわち張仲景も南陽の人であり、何顒に会ったのは、彼の死亡推定年代の初平三年（一九二）以前ということになる。また張仲景が長沙太守であったということも確定的ではないが、清の孫鼎宜は、張機の機は羨であり、この張羨は長沙太守張羨のことであるという。皇甫謐の『黄帝三部鍼灸甲乙経』の序に張仲景が王粲の死を予見した記事がある。この王粲、字は仲宣、建安時期の著名な詩人である。彼は呉への征に従って死亡した。その原因は建安二十二年（二一七）の大疫によるものである。すなわち張仲景は、長沙に居たか、または関係があった。簡牘の出現地も長沙である。

発見された簡牘は後漢の末から三国の呉に至る時代のものである。西暦二二〇年から二三七年に相当する。

この年代は後漢末の『傷寒論』の著者張仲景の年代に非常に近い。

張仲景の自序と考えられているもの『傷寒卒病論集』によれば、「余の宗族素より多し、向かうに二百を余す。建安紀年（一九六）以来、猶を未だ十念（二〇六）をえずして、死亡する者三分の有二にあり。傷寒十にして其七に居り」とある。これによれば『傷寒論』は西暦二〇六年ごろに書かれたと思われる。二百人を越える宗族の三分の二が死亡し、その七割が傷寒の流行病であったとあるから、その当時の疫病の流行がどんなに激しいものであったか知れる。

『長沙走馬楼三国呉簡・竹簡』は戸籍簿と田租の文書、その集計、さらに手紙文書などである。竹簡の戸籍簿の内容は、一般的に住所、戸人、爵位、姓名、年齢、「算」数、体の特徴、患っている疾患などの項目が記入されている。

竹簡に現れた疾病名は、刑右足、刑左足、刑両足、雀左手、雀右足、雀左足、腫両足、腫右足、腫左足、盲目、盲右目、盲両目、聾両耳、苦癰病、苦腹心病、苦風病、龍耳眇目、□染病物、遣疾並馳などである。これらの疾病名は、医者によって診断されたわけではない。戸籍を記録する官吏が労役に耐えるかどうかを判断するために、外的に観察される疾病や傷害を記録したものである。

『傷寒論』『金匱要略』にこれらの疾病を確認すると苦腹心病のみが、心腹痛に相当すると思われる。その他は『傷寒論』や『金匱要略』には確認できない疾病名である。すなわち戸籍の記録と『傷寒論』や『金匱要略』の疾病治療は自ずと目的が違うが、同一地域と同時代に記録された資料として注目されなければならない。また急性期の疾患の治療が目的である『傷寒論』は、同時代の大疫と社会構造を視点にしなければ、より深い内容を検討することはできないと思われる。